

大水上山(1830 m)

田中正雄

ついに大水上山に登った。いや、登らせて貰ったと言った方が正しいかもしれない。

もう20年以上前から念願の山だった。新潟・群馬の県境最北、尾瀬の北方越後山脈中央に位置する標高1830 mの利根川の水源地である。中級山岳だが最奥にあるから簡単には近づけない。

今回サポートを引き受けてくれたのは札幌在住の畏友Iさんである。綿密な計画をたて、何度も修正を加えた案を送ってくれた。僕も準備怠り無くジムに通い、筋肉や心肺機能を高めた。

梅雨の豪雨が続いて直前一ヶ月あまりは山に行けなかった。炎天登山に身体を慣らす準備が不足していた。出発前日に旧職場の山の会が鳳凰三山前衛の千頭星山(2139 m)への日帰り登山を行ったので、これに参加してトレーニング終了とした。

7月18日。東京駅で下田から来た早期退職農業のS氏、練馬の保育士Hさんと落ち合った。畏友Iさんが選んだメンバーである。この日は、奥只見の銀山平・伝之助小屋に入り、フェリーで新潟から入山したIさんと合流した。

7月19日。午前4時発のマイクロバスで平ヶ岳(2141 m)登山口に向かった。日帰り登山だから荷物の大半は小屋に残し、身軽に標高差1000m足らずを3時間半ほどで登った。湿原と池塘と雪田が広がる美しい山だった。下山時に明日辿る越後駒から中ノ岳の稜線を観察した。

7月20日。午前3時起床。朝食に作ってもらったお握りを食べ、パッキングをする。避難小屋一泊の予定だが、予備日を入れて2日分の寝食で荷重は12kg程になった。水は駒の小屋で補給できると分かったので、とりあえず1リットルだけ用意した。4時出発で枝折峠まで車で送ってもらった。

標高1000 mの枝折峠を4時半に出発。荒沢岳(1969 m)の勇姿を眺めながら登って行った。小倉山までは小さなアップダウンが続き、ほとんど標高が上がらない。ただ主稜線への距離を詰める行程である。これに3時間を要した。ここから急な登りが始まった。

百草の池まで200 mを1時間、前駒まで200 mをさらに1時間。午前10時に駒の小屋に到着。雪溪からの冷水が迸っている水場で思う存分飲み、すべてのポリタンクに水を満たした。昼食のお握りを一個食べた。頂上へ向かう。水を加えて15kg近い荷重はずしりと来た。この日はガスが湧いて中ノ岳も八海山も見えない。

越後駒(2003 m)は二度目の登頂だった。昔、北山ク会員の宇都さんと登った。その山頂を午前11時過ぎに出発した。いよいよ縦走開始である。百名山の駒は賑わっているが、この先南へ進む人はいない。登山道は苔に覆われている。緩やかな下りを辿ってゆく。

たくさんの花々を見た。キバナシャクナゲ、コイワカガミ、イワウメ、ミヤマキンバイ、タカネナデシコ、ハクサンイチゲ、ハクサンチドリ、ミヤマタンポポ、ハクサンコザクラ。尾根は痩せぎみで、踏まれていない足下は不安に満ちていた。約30分で八海山方面へのクシガハナ分岐、ほとんど通過不能の痩せ尾根が続くという。分岐の先の諏訪平には遭難碑があった。ここまで約200 mの下り。その先で一瞬ガスが切れて真正面に中ノ岳が姿を現した。その見事さに息を呑む。スケッチの走り書きも終えぬうちにまたガスが閉ざした。

さらに下って最低鞍部の天狗平に着く。1700 mレベルまで下ったことになる。ここからの登り返しが苦しみの始まりだった。午後1時半に1780 m。かなり消耗していた。ここで食べれば良かったのだが、食欲が無かった。檜廊下と名付けられた尾根道に行く。名称から坦々とした廣尾根を想像していたが実態は違った。檜の根っこと岩の混在する歩きにくい痩せ尾根だった。小さな起伏を巻いたり登ったりして進んだ。標高は上がらない。体力が落ちてくる。シャリバテを怖れて残りのお握りを食べた。

目の前に1866 m峰が迫る。このわずか100 mの登りが応えた。Iさんは30分毎に休憩をとってくれたが、そのたびに立ち上がるのが辛くなった。エネルギー補給のため、チョコレートを口に入れるが飲み込みに苦労する。午後4時半に1900 m地点。目の上に中ノ岳頂上部が迫ってくる。あと

100 m余、一時間の頑張りが必要だった。

そしてついに中ノ岳避難小屋到着。午後5時半。枝折峠出発から13時間を要したことになる。

ザックを下ろすと急に身体が軽くなり、皆と頂上(2085 m)を往復した。三山中の最高峰なのに駒と八海の中ノ岳とは気の毒な名称だが、展望を誇る頂上はさすがの風格だった。ここに登ってくるのは年に何人だろう。もったいないことだ。

清潔な良い小屋での一夜は快適だった。梅雨が明けたばかりの天水タンクは満杯でコックを捻ると水が迸ったから煮沸して使えば水の心配は無かった。半月が明るかったが、北斗七星などの星が美しかった。

7月21日。午前4時起床。快晴。日向山経由の最短コースで十字峡へ下るS氏、Hさんを残して、僕とIさんは4時半に出発した。頂上へ登り返して、南へ下る。兎岳から大水上山、丹後山の稜線が一目瞭然に横たわる。豪雪地帯で森林限界が低いから、チシマザサに覆われた稜線がそここに雪田を残して伸び伸びと広がる美しい眺めである。しかし行く手のなんと遙かなことか。

今日も出だしは300mの下りである。まず、日向山への分岐を過ぎ、小さな起伏を幾つも越えて下る。最低鞍部を過ぎて登りに掛かるが、これまた小さな起伏の繰り返しで、小兎岳がちっとも近づかない。Iさんには時間切れで丹後山避難小屋に不時着の心配が兆したようだ。「ポリタンクを全部出してください」と雪田から水の収集を始めた。

遅々とした亀の歩みも弛みない蓄積はある。中ノ岳から4時間を要したが遂に兎岳(1926 m)に達した。午前9時。もう登り返しは無く、快適な縦走路に入る。

大水上山まで1時間弱であった。とうとう来た。念願の山頂は穏やかな表情で迎えてくれた。Iさんは「カップを出して」と言って、手製の粉末と雪田の水でアイスコーヒーを手早く作ってくれた。これ以上のご馳走は無い贅沢だった。

山頂を南へ右カーブ気味に続く尾根の先に利根川水源碑があった。尾根の直ぐ下に大きな雪田が残っていてその遙か下部の滴りがまさに利根川の誕生なのだった。

目的を果たして丹後山へ。幸い避難小屋の世話になることなく、11時半には下山に掛かった。しかし、ここから1500 m近い下りは生易しいものではなかった。3時間もあれば下りきれると思ったのは大間違い。大きな山のスケールに圧倒され、脱水気味の体調に苦しみ、体力の限界を感じる下山となった。Iさんは、随所に休みを入れ、アイスコーヒーを飲ませ、時折り首筋にひんやりしたスプレーを噴霧してくれ、「ゆっくり行きましょう」と繰り返してくれた。4時間半を要した下山の終わり、登山口には、先行したS氏の連絡による新潟在住のTさんの出迎えがあった。

冷えた缶ビールを差し出されたが、脱水症状にアルコールではと懸念して辞退し、胡瓜を有難く戴いた。さて、出発となって「ザックは私が背負いましょう」と初対面の女性に荷物を取り上げられ、空身で続いたが、情けないことに荷物を背負った二人に就いて行けなかった。一生懸命に歩いているのに差が開いた。

十字峡にはTさんの新車が停めてあり、一気にさくりの湯へ連れて行かれた。そこにはS氏とHさんの寛いだ姿があった。Iさんの配慮による完璧なサポートであった。

Iさんは僕の友人、S氏はIさんが光岳で出会った人、HさんはS氏が常念小屋で20年前に同宿した友人、そしてTさんはIさんとS氏が朝日連峰狐穴小屋で3年前に同宿した人。ただ山という僅かな縁で繋がった人情の連鎖がもたらしてくれた不思議な幸せ。その温かさに包まれた最高の山行であった。

2010.7.18～21